

Einleitung, Moses Hess. Philosophische und sozialistische Schriften 1837-50. Eine Auswahl. Herausgegeben und eingeleitet von August Cornu and Wolfgang Mönke.

Berlin, 1961

オーギュスト・コルニユのヘス研究

畑 孝 一

ま え が き

ドイツにおける初期社会主義、いわゆる真正社会主義の代表者と見なされているモーゼス・ヘス(1812-75)についての研究は、その思想の評価やマルクスに対する影響についての見解によっていくつかに分かれるが、その代表的なものは、一つはマルクス主義の立場から、「共産党宣言」におけるマルクスの真正社会主義批判に基づきヘス思想の《空想性》を批判し、マルクスに対するヘスの影響を否定する、G-ルカーチやそれに基づくE-ゴイタインの研究

1)であり、いま一つはマルクス主義以外の立場から、ヘス思想の《空想性》あるいはそのシオニズムを高く評価するI-バーリンやJ-ワイスの研究、2)およびマルクスの思想をその初期の側面たる人間学的思想としてとらえ、ヘスにおける人間学的側面を高く評価するとともにそのマルクスへの強い影響を認めるE-ティアアやそれに基づくT-ツロシステイの研究3)である。

これらの研究に対して、ここでとりあげるコルニユの研究4)は、マルクス主義の立場からヘス思想の《空想性》を批判する点で基本的にルカーチと同じ

1) G. Lukács: Moses Hess und die Probleme der idealistischen Dialektik, Sonderabdruck aus dem von Carl Grünberg herg. Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, XII, Lpz., 1926

I. Goitein: Probleme der Gesellschaft und des Staates bei Moses Hess. Lpz., 1931.

2) I. Berlin: The Life and Opinions Moses Hess, Camb., 1959.

J. Weiss: Moses Hess, Utopian Socialist, Detroit, 1960

なおこれらの書物については、次の書評がある。山中隆次「最近のヘス研究から」(「和歌山大学経済理論」,60号)

3) E. Thier: Das Menschenbild des jungen Marx, Göttingen, 1957.

T. Zlocisti: Moses Hess. Der Vorkämpfer des Sozialismus und Zionismus. 1812—1875. Ein Biographie, Berl., 1921.

なおティアアのマルクス解釈については、良知力「初期マルクス解釈について」(マルクセ「初期マルクス研究」良知・池田共訳, 未来社, 1961)を参照されたい。

4) A. Cornu: Moses Hess et la gauche hégélienne, Paris, 1934

なおヘスとマルクスとの関係については、彼の次の諸著作を参照されたい。

Karl Marx et la pensée modnrne. Contribution à l'étude de la formation du marxisme, Paris, 1934. 訳「マルクスと近代思想—マルクス主義形成過程の研究のために—」法律文化社, 1954

Karl Marx und Friedrich Engels, Leben und Werke, Bd. I, 1812—1844, Berl., 1954. なおこの書物については、重田晃一氏の紹介がある。「初期マルクスと青年ヘーゲル派—初期マルクス研究に関する一展望」(「関西大学経済論集」7巻, 7号)

Karl Marx. Die ökonomisch-philosophischen Manuskripte. Berl., 1955.

なおヘスの著作、書簡およびヘスに関する文献については、次のものを参照されたい。

T. Zlocisti (Herg.): Moses Hess. Sozialistische., Aufsätze, 1841—1847. Berl., 1921.*

立場に立つが、マルクスに対するヘスの思想的先行性を認め、とりわけマルクスの思想形成過程におけるヘスの影響を高く評価するところに、大きな特色がある。ここで扱う「序文」は、いわばコルニュのこれまでの研究の総括ともいべきものであって、そこではマルクスとの関係という視点から、ヘスの思想と生涯とが手ぎわよくまとめられている。そこでここでは、とくにマルクスとヘスとの思想的関係に焦点をあててコルニュのヘス研究を紹介し、その若干の問題点を指摘することにしたい。

I

コルニュは「選集」の「まえがき」で、ヘスの思想的発展を次のような3つの時期に分けている。すなわち、ヘスの思想は、1837年にスピノザに基づいてユダヤ教に社会主義的傾向を与えようとする試みから始まり、それはドイツの初期社会主義の一つとして意義をもつ。その後の1844—45年までの思想は、社会主義に《科学的》、つまり哲学的基礎を与える試みをもつもので、それは彼の空想的気質、不十分な才能および小市民的立場によって一定の限界もっていたが、そこに見いだされる史的唯物論の萌芽は、マルクスとエンゲルスに影響を与えたものであった。そしてその思想は、フィヒテからフォイエルバッハまでのドイツ哲学を社会主義に組み込む試みとして、ヘーゲル哲学の解体過程を示すものであり、また、科学的社会主義の先行者、平行現象および背景となっている。1845年以後は、ヘスは自分の空想的立場を克服してマルクスとエンゲルスの立場に近づこうと努力したが、彼はそれに失敗した¹⁾のであって、そこには彼の思想的停滞と彼に対するマルクスとエンゲルスの影響が認められる。

コルニュは基本的に、このようにヘスの思想的発展をとらえ、その中でいくつかの点にマルクスに対

するヘスの思想的先行性及び影響を認めているのであるが、次に、コルニュの叙述に従いヘスの思想的発展をたどりながら、それらの点をコルニュがどのようにとらえているかを示してみよう。

II

ヘスはユダヤ人としてユダヤ教的教育を受けたため、彼の最初の著書「人類の神聖史」*Die heilige Geschichte der Menschheit* (1837)にはその強い影響が現われている。彼はそこで、未来の人間社会を人間によって認識され実現さるべき神の意志の現われと解して、意識が発展して神の意志と同一化すること、つまり現在分裂している無意識的な神と人間との一致を意識的に回復することによって、人間相互の調和を実現しようと考へ、現在のあらゆる人間相互の対立が根ざしている富と貧困との対立を、その原因たる私有財産の廃止によって調停し、社会的平等と《財の共有》*Gütergemeinschaft*を保証する社会を作り上げねばならないと主張した。

このようなヘスの思想を、コルニュは、神と自然との同一化というスピノザの思想にユダヤ教のメシヤ思想に含まれた発展の契機を与えるものであり、歴史の発展を内的必然性による過程としてとらえることによって未来の発展を導き出そうとするものであるとし、ヘスの意図は初めからヘーゲルを越えていたと見なす。さらに彼は、ヘスが社会問題を前面に押し出し、社会的平等と私有財産の廃止を主張するところに、フランス社会主義の影響と当時のドイツの自由主義思想に対する決定的な進歩とをみとめる。しかし、ここには、マルクスとの関係が目すべきものはまだ現われていない。

1841年にヘスは「ヨーロッパ三国同盟」*Die europäische Triarchie*を現わしたが、それは、人類解放のための、独・仏・英、三国の提携による《ヨ

* E. Silberner (Hersg.): *Moses Hess Briefwechsel*, Amsterdam, 1959.

E. Silberner: *The works of Moses Hess, An inventory of his signed and anonymous publications, manuscripts and correspondence*, Amsterdam, 1958.

1) コルニュは、この失敗は1850年頃に決定的になったと見なして、この「選集」に含めるヘスの著作を1850年までに限り、また「序文」でもそれ以後のヘスについては簡単なスケッチにとどめている。参考までにその目次をあげておく。I 宗教と社会主義。II 《真正》社会主義の基礎づけ。III 社会主義的煽動活動。IV 《真正》社会主義に対する科学的社会主義。V 1850年から1885年までのヘスの生涯のスケッチ。なお、コルニュの規定するヘス思想の第1期はIに、第2期はIIに、第3期はIIIとIVに相当する。また、本文からの引用頁数は、同じ頁からの最後の引用文の後に、()に入れたアラビア数字で示した。

ーッパの全体的変革」という政治的・社会的に徹底した結論(20)をもつものであって、そのさい彼は、青年ヘーゲル派の行為の哲学を發展させて、そこから社会変革の歴史的必然性を導き出そうとした。

彼の行為の哲学は、ツィンコフスキーのそれと同じ方向を目指すもので、生命を《思惟の外に行為をもつもの》としてとらえ、《意識的に精神的で社会的な生命の領域で事実的に実現》さるべき、思惟と存在との統一としての意識的な活動によってのみ、人間は《積極的に歴史に関与し自己創造的に行動する》ことができるとした。だから彼にとって、《課題は、過去と現在から……未来を推論し規定することにある》。そこで彼は《近代ヨーロッパの歴史を、その目標が精神的ならびに政治的自由と社会的平等である解放運動としてとらえ》(21)、ドイツの宗教改革によって獲得された精神的自由とフランスの革命から始まった政治的自由とに、《貨幣貴族制》Geldaristokratie と《社会的窮乏》Pauperismus との対立がもっとも著しい英国で起るべき未来の革命によってえられる社会的自由が加わることによって、自由と平等とが実現され人間の解放が完成するとした。こうして実現された社会を、ヘスは、《孤立して敵対する諸利益の平和的統一》(22)としての国家と見なし、国家の教会に対する優越を要求した。だから、彼の主張は国家変革であったが、それはむしろ社会主義的な社会改革を意味していた。

コルニュは、このようなヘスの思想に、とりわけ現実の政治的・社会的發展から未来を導き出すところに「神聖史」と比べた決定的進歩を認め、それを《唯物論的萌芽》(23)として高く評価する。また彼はヘスの行為の哲学に、社会主義の未来に必然性の性格を与える要素をドイツ哲学からとり入れようとするヘスの努力を認めて、ヘスは必然的で法則的な歴史的發展という歴史把握をヘーゲルからとり入れることによって、歴史を本質的に精神の發展によって規定されるものとしたが、《歴史的發展を目的意識的な人間の意識を従属させる》(21)ことによってヘーゲルからフィヒテに還帰し、さらに《自己意識》と《実体》とを意識的活動で媒介することによって青年ヘーゲル派からもはなれたと見なし、こ

の《行為の哲学は、意識に歴史的生成の決定的役割を与える》ことによって《思弁的な観念論哲学》になり、ヘスの思想は空想的限界を越えることができなかつたが、《未来の社会主義社会を歴史的必然性》としてとらえることによって、ヘスは《ドイツの理論的社会主義運動の先頭に立った》(22)としている。

さて、上述のように、ヘスの思想は、ブルジョア社会の変革という社会主義的目的と、その核心思想によるヘーゲル哲学の克服、つまり未来の歴史的發展の必然性の論証という課題をもっていたが、1842年の「ライン新聞」の諸論文では、ヘスは、《フォイエルバッハ的な人間学的ヒューマンイズムの基礎》と《社会主義社会の経済的ならびに社会的基礎》(26)とを主張するようになった。

すなわち一方で、ヘスはフォイエルバッハの宗教批判つまり人間学的に基礎づけられたヒューマンイズムに、彼の社会主義の哲学的基礎づけを見だし、調和した類的生活が人間の本質であるならその実現としての社会主義は必然性をもっと主張した。コルニュはヘスのこの考えを、ドイツの経済的後進性＝階級対立の欠如と彼が現実の労働者運動に無関係であったこととのために、彼が人間の考えを変えることを目的とする道徳的な理論によって階級闘争を補完しようとしたことを示すものと見なし、ヘスはフォイエルバッハ的ヒューマンイズムを社会主義思想と結びつけた最初のものであって、それによって、マルクスとエンゲルスの先行者になったが、また空想的理論たる真正社会主義の創造者ともなったとしている。

他方ヘスは、英国において《貨幣貴族制》と《社会的窮乏》との対立がもっとも鋭くなっているのは、生産と商業との資本主義的集中によると見なし、国家及び政治的変革による社会改革の可能性を否定するようになった。(そのさいの政治闘争の軽視は、社会革命における政治権力の意義を認めるマルクスに批判された) 1)コルニュは、このようなヘスの資本主義の物質基礎の研究を、ヘスがそれを継続したなら《共産主義の倫理的要求を歴史的に基礎づけられた共産主義理論に変え》えたものとして高く評価する。しかしヘスは、それ以上、過去の科学的認識

1) cf. K. Marx: Die Zentralisationsfrage, MEGA I, 1/1, S.231. 訳「マルクス・エンゲルス全集」改造社版, 173—174頁.

から必然的な未来を導き出そうとせず、必然的な未来を推論することから実践的な規範を獲得しようとしたため、彼の《史的唯物論の萌芽》を發展させることなく、さらに《共產主義を哲学的に》基礎づけようとしたのであった。

それは「21ボーゲン」誌の諸論文その他（1842—43）に現われているが、そのうちワイトリングとシュタインを批判した二つの論文では、ヘスは彼らの物質的基礎に基づくプロレタリアートの階級把握やその実践的表現としての共產主義理解に反対して、共產主義を何よりもまず純粋な理論的帰結、その歴史的必然性の理論的表現と見なし、そこから《共產主義の実現は主として意識形成つまり教育と啓蒙にかかわる問題であるという観念論的結論》（33）を引き出した。このような共產主義把握を哲学的に基礎づけた論文が「行為の哲学」*Philosophie der That*であって、ヘスはそこで人間の本質を活動性 *Tätigkeit* としてとらえ、フィヒテに《活動性を非我的措置および止揚として特徴づける。この過程で自由な自己規定に向う精神の自己創造が完成する》精神的ならびに社会的な不自由を意味する宗教と政治の支配は、精神が自己の本質を認識し実現しうる前に現われねばならないところの、精神の發展における必然的な一段階であって、精神の自己との対立、自由な自己規定の制限をなし、その除去の後に初めて自由が実現される（そのさい精神的自由が社会的自由の上位に置かれる）。したがって宗教と政治的支配の基礎をなす私有財産とは、人間の本質たる自由な活動と調和しえない。だから、共產主義は無神論として宗教を否定し、アナーキーとして、社会的不平等の手段にすぎない国家を否認するものである。また「我ら何を欲するか」*Was wir wollen*でも、ヘスは自己意識が人間に自由になると見なし、自己意識をもたない大衆において自己意識を發展させることによって、自由な自己行為 *Selbsttat* としての現実的自由が実現されると考え、現在の教育手段の分配の不平等の止揚および《自己活動的精神と両立し難い物質的財産の否定》（34）を要求した。さらに「唯一全体の自由」*Die Eine und ganze Freiheit*では、とくに精神的自由と社会的自由との相互依存が強調され、宗教における人間の本質の精神的疎外は《政治的支配として外化している社会的疎外》（36）によって補完されているから、宗教的解放は社会的解放を伴わねばならないとされた。

このようなヘスの思想を、コルニュは、フィヒテ

とフォイエルバッハとを結びつけることによって、《宗教的ならびに社会的領域における人間の本質の疎外の止揚を、人間解放の根本条件として要求した》ものとしてとらえ、次のように説明する。ここではヘスは以前の経済的動因には基づかず、《客観的妥当性を要求する人間の本質規定から出発して、そこから共產主義を、人間が自己の本質を意識した後に実現する人間の本質に必然的に相応する社会として導き出す》、つまり、《物質的な歴史過程の認識》に基づかずに《主観的歴史過程を客観的歴史過程に転化》し、《共產主義を主観性の領域から引き出してそれに客観的必然性の性格を与え》（35）るのである。そこでは客観的弁証法が主観的弁証法に変えられているのであり、したがってヘスにあっては、歴史は依然として《本質的に独立した哲学的カテゴリーの發展》として精神的解放過程であり、《共產主義はそれを担う階級たるプロレタリアートによって獲得されるものではあるが、人間が自己の本質を認識し外に形成する發展過程の結果として現われた》（30）。だからヘスには、《私有財産の除去は教育の制限の除去としてだけ理解された》のであった。要するに、《ヘスは〈不平等〉の現実的な経済的・社会的諸前提から出発しないで意識的事実 *Bewusstseinstatsache* から出発した》（36）ため、プロレタリアート解放の問題を観念的平面に置くことになり、不可避的に観念論的—空想的解決をもたらしたのである。だから、そのようなヘスの思想が、《真正》社会主義の理論的基礎を作り出すとともに、ドイツ労働者運動に後退をもたらしたのであった。

コルニュはこのようにヘスを批判しながらも、またヘスは、《社会主義に科学的、つまり〈哲学的〉基礎を与える最初の試み》、《ドイツの哲学的急進主義とフランスの社会主義との最初の結合》及び《唯物論的实践概念の完成のための一定の前仕事》を行なったとして、これをヘスの積極面と見なし高く評価する。とりわけ彼は第3点に注目し、ヘスは意識的な社会的活動が社会的發展にとって決定的であるという認識に基づいて、スピノザの静観的な統一の思想を実践的・現実的にするため、ドイツ哲学の活動と実践の諸要素をとり入れた自己の行為の哲学を作ったのであり、そこには観念論的ではあるが活動が人間の本質をなすという思想がはっきり示されているとみなし、《ドイツ古典哲学に対するヘスのとりくみの核心は、マルクスに強い感銘を与えたにちがいない》（38）と結論する。そして彼はこの裏づ

けとして、「経済学・哲学手稿」におけるマルクスのヘス評価¹⁾を引用している。

その後《共産主義の〈哲学的〉基礎づけ》は、1844年に書かれた(発表は1845年)論文「貨幣的存在について」Über das Geldwesenにおいてさらに発展した。ヘスはそこで、フォイエールバッハの宗教批判の方法を資本主義社会の経済的ならびに社会的分析に適用して、《この社会制度の本質的特徴を、人間が、プロレタリアートも資本家も、自己の本質をそれに外化している貨幣の支配に見た》。すなわち、ヘスは「行為の哲学」における生命の本質は活動性であるという思想を発展させて、《今や活動性を観念論的な個人的自己規定としてではなく、人間の生活と発展とに必要な環境としての社会の枠の中で常に生ずる、財を生産する労働としてつかんだ》。

彼によれば、人間史の発端においては活動性は組織されず人間は独力で生活した。そしてそのような生産力と未完成の人間の本質との原始状態では、活動性は必然的に奴隷制の形態をとったが、その自乗された形式が資本主義社会であって、そこでは人間の本質の外化が、宗教においては神の支配によって理論的にそうであるように、貨幣の支配によって実践的に普遍的な形態をとった。つまり《資本主義社会では、人間的労働の産物の化身たる貨幣が人間にとって外的で疎遠な力、人類が崇拜するのに人類を抑圧する神になった》。そして《原始的な孤立した活動性から全く完成した利己主義の組織に至るまでの》人類の自然史たる第1の段階において、人類は自己の本質を発展させたので、今やその本質つまり《人間的類としての諸個人の協働》が形成され理論的に認識されている。この本質は、現在の《生産力の増大のために過剰になるまで発展した財の生産》(44)によって、現実活動させることができる。《だから、人類は彼らの歴史の第2段階の入口に立っているものであり、その第2段階では共産主義によって有機的な共同社会が現われ、そこでは個人が類を犠牲にして自己の利益を貫くのではなく、調和した類的生活において諸個人がすべてのものの福祉の

ために協働するのである。そこでは私有財産は、創造された対象と創造する人間との内的結合という所有形式に変えられる》。そして資本家が享楽欲のために滅亡せず、あるいは理解と愛とが人間の本質を勝利させないなら、《共産主義への移行は労働者の側の貧困と資本を蓄積する有産者の側の富との対立の尖鋭化から生ずる革命によって実現するだろう》。

このようなヘスの思想を、コルニュは、《『21ボーゲン』誌の諸論文に比べて、何よりもまず経済的視点をとりあげるとい著しい進歩を示す》もの²⁾と見なし、それを、ヘスが《社会的窮乏》と《貨幣貴族制》に変えてプロレタリアートと資本家を用い、また生産力の概念を用いたところに認めている。しかしヘスにおける《経済的視点》は不徹底なものであって、コルニュはそれを次のようにとらえている。歴史的発展における生産力の意義および社会制度の生産力への依存関係については、ヘスはばくぜんと感じているだけであって、ヘスの生産力による社会制度の区分は、道徳哲学的なそれに比べれば第2義的なものにすぎない。つまりヘスは、《ブルジョア社会を現実の階級対立を抹消する利己主義の社会に変え、また彼が高い生産力の発展段階と共産主義社会との間に見ている関連は、資本主義的社会制度の止揚のための客観的必然性は最後の生産力の発展に基礎づけられる。》という理解を内容としていない。彼が生産力を共産主義と関連づける場合には、《生産力はただ人間の本質の活動を許す可能性としてだけ現われる》(45)のである。そのため彼は、愛と理解とによる社会の社会主義的変革の可能性をも承認することになり、そこには《ブルジョア社会の認識における大きな進歩にもかかわらず脱していない、彼の古い混乱が現われる》のである。

しかしコルニュは、このようにヘスを批判しながらも、《フォイエールバッハ的な人間的外化及び疎外の把握を社会的ならびに経済的領域に転用することによって、ヘスに1843年末から1844年初めにかけてマルクスに一定の影響を及ぼした》と見なし、その影響を《ヘスが疎外理論をブルジョア社会の社会的

1) マルクスは、彼の利用した文献として、《『21ボーゲン』誌にのったヘスの論文》をワイトリングの著作やエンゲルスの「国民経済学批判大綱」と並ぶ《内容ゆたかで独創的な諸著作》として高く評価している。(cf. Marx-Engels: Kleine ökonomische Schriften., Berl., 1955. S. 43. 訳「マルクス・エンゲルス選集」大月書店版、補巻4、228—229頁。)

2) コルニュは、ヘスがこの論文を、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」の影響のもとに書き換えた可能性を認めている。(cf. S. 471, Anm. 120.)

・経済的諸関係の分析に適用する誘因を、マルクスに媒介した》点にみとめて、資本主義社会の《本質の解明はマルクスにあっては、エンゲルスの、また短期間はヘスの理論的影響のもとで行なわれる》と結論する。しかしコルニュによれば、マルクスはエンゲルスの「国民経済学批判大綱」による影響と歴史のおよび経済的研究とによって、《経済が資本主義社会の生成、発展および必然的な死滅を理解するための基礎である、という認識に達していた。だから「経済学・哲学手稿」においてすでに、疎外の事実はブルジョア社会の本質としてよりもむしろ症状としてとらえられている》(46)のである。

さてヘスはその後1850年にかけて、人間を自然と社会との創造物としてとらえ、《思想は一定の歴史的事実に基づかなければ、それだけでは社会の変革をなしとげることができない》と見なし、また《資本主義社会に内在する、社会的生産と資本主義的な生産物の取得との矛盾》(54)を、資本主義における過剰の中の欠乏に見て、それを生産者からの生産物の分離に還元し、その分離の止揚を共産主義の目標と見なして、共産主義は社会の物質的生産に基礎づけられねばならないと考えるようになった。しかし、彼の見解の基礎は依然としてフォイエルバッハの哲学であったため、生産者と生産物との分離の基礎を生産手段の私的所有に認めず、したがって生産手段の社会化という根本問題を抽象的な《有機的》所有によって解決しようとした。また彼はプロレタリアートの歴史的役割を認め、社会主義革命の必然性を経済的発展の結果として生ずる階級闘争から導き出すが、他面その具体的方法や権力の問題を考えることなく漸次的改良による革命の可能性をも認めた。

このようなヘスの思想を、コルニュは、マルクスとエンゲルスの影響のもとに彼らの新しい世界観を

とり入れようとしたヘスの努力とその失敗とを示すものとしてとらえる。つまり、ヘスにおける自己の立場の克服は、マルクスによる批判との妥協であり、マルクスの見解と彼の真正社会主義の見解との折衷にすぎなかったのである。かくしてコルニュによれば、《ヘスは若干の史的唯物論的萌芽をこえて、一般的には歴史的発展の、特殊的には資本主義社会の、科学的で全体的な理解に発展することができず、》(54)したがって、《彼自身史的唯物論的歴史把握に向って歩み始めることはできなかった》(47)その目標に達することはできなかったのであり、そのために、1844年以後は理論的発展がヘスを越えてしまい、彼は社会主義の理論的発展の頂点に立つものではなくなったのであった。

III

さて、以上のようなコルニュのヘス思想の把握、とくにマルクスに与えたヘスの影響に対する見解について、最後に若干の問題を指摘することにしよう。

まず指摘したいことは、ヘスの影響に対する彼の見解がこれまでの研究と比べて基本的には同じであるが、若干異なっていることである。すなわち、コルニュはこれまでマルクスへの影響を、(1)ヘスが「行為の哲学」でフォイエルバッハの宗教における疎外の理論をブルジョア社会の分析に適用し、私有財産の廃止によってのみ人間の社会的疎外を止揚しようと考えたところに認め¹⁾、その点でヘスはマルクスに先行しており²⁾、マルクスはヘスの影響によって疎外を社会的観点から考察するようになった³⁾と見なし、また、(2)ヘスが「貨幣的存在について」でブルジョア社会の分析を發展させて、私有財産から排除された労働者はその本質を自分が作り出した商品に外化し、その商品の転化した貨幣に支配されて

1) 私有財産の廃止という点での影響については、コルニュの見解は一定せず、それを認める場合 (cf. Moses Hess, S.84.) と認めない場合 (cf. Marx und Engels.) がある。そしてこの相違によって、ヘスの影響をマルクスの思想的発展のどこに認めるかという問題に対する彼の見解に相違が生ずる。すなわち、彼は、ヘスの影響をこの点と疎外の理論の適用との双方に認める場合には、その影響を、私有財産の廃止が問題とならない「ヘーゲル国法論批判」からそれが問題となっている「独占年誌」の2論文への移行の契機としてとらえる (cf. Marx et la pensée moderne, 訳, 108頁.) が、影響を後者だけに限る場合には、それを「国法論批判」におけるフォイエルバッハ克服の契機としてとらえる (cf. Marx und Engels, S.417—418. なお、重田、前掲稿, 54頁参照)。

2) cf. Cornu: Marx und Engels, S.418.

3) cf. Cornu: Marx et la pensée moderne, 訳, 112頁.

自己疎外が生ずると考えたところにも認め、ヘスのこの考えは《マルクスにとって彼の世界観の決定的転回の出発点として役立ち1)》、マルクスは「経済学・哲学手稿」でヘスの《疎外された労働》という考えによってブルジョア社会の分析を行ない2)し、人間の疎外を労働の疎外として考察し人間解放の根本問題を疎外された労働の止揚に認めるようになった3)と見なしていた。

これに対しこの序文では、コルニュは、前に見たように、(1)「行為の哲学」における共産主義の《哲学的》基礎づけ、つまり共産主義を歴史的発展の必然的結果として論証しようとする試みにヘスの影響を認め、ヘスが《ドイツ哲学から活動と実践の諸要素をとり入れて》人間の本質を活動としてとらえ、《唯物論的实践概念》を作り出そうとしたことは、《マルクスに強い感銘を与えた》と見なし、また、(2)「貨幣的存在」によって《ヘスが疎外の理論をブルジョア社会の社会的・経済的諸関係の分析に適用する誘因を、マルクスに媒介した》と見なしている。したがって、これまでと比べて、ヘスの影響に対するコルニュの把握は若干異なり、いくらか《控え目》になっているといえる。

次に、コルニュのとらえるヘスの影響について見ると、私はかつて「貨幣的存在」におけるヘスの《疎外された労働》の概念を分析して、それが「手稿」におけるマルクスの概念と決定的に異なることを指摘した4)が、要するに、ヘスの概念がいわば《小商品生産》における《疎外された労働》であるのに対

して、マルクスは《資本制生産》におけるそれをとらえているのであって、その意味で、マルクスがヘスの《疎外された労働》に基づいてブルジョア社会を分析したとするコルニュの見解は同意し難い。

この問題については、最近発表された労作「ヘスとマルクス」5)において、和歌山大学の山中隆次氏がより根本的に論じられている。同氏は「貨幣的存在」における《疎外された労働》観を中心としてヘスとマルクスとの関係を問題とし、それを《いわゆる〈市民社会〉の経済的疎外、とくに〈貨幣の物神性〉》としてとらえ、その点については、マルクスはヘスより前に、すでに「独仏年誌」の「ユダヤ人問題によせて」において明らかにしていると見なして、この点でのヘスのマルクスに対する先行性というコルニュの見解を批判し、むしろ両者の同時性を強調される6)。したがって、コルニュがこの「序文」で言うように、《ヘスが疎外の理論をブルジョア社会の社会的・経済的諸関係の分析に適用する誘因を、マルクスに媒介した》と見なすことはできない。

さらに、ヘスが《ドイツ哲学から活動と実践との諸要素をとり入れて》人間の本質を活動としてとらえたことに対するマルクスの《感銘》については、コルニュのように、「手稿」におけるマルクスのヘス評価によってある程度認めうるとしても、次のようなルカーチの指摘、すなわちヘスの《ヘーゲル哲学の静観性を克服してその弁証法を實踐化しようとする試み》は、彼を《必然的にフィヒテに引き戻す》

1) Cornu: Marx. Manuskripte., S. 9. cf. Cornu: Moses Hess., S.93—94. Marx und Engels., S. 533.

2) cf. Cornu: Marx et la pensée moderne. 訳 121 頁.

3) cf. Cornu: ibid., 訳121, 124頁. Marx und Engels., S. 516, 523, 545—546. Marx. Manuskripte. S. 9—10.

4) 拙稿「モーゼス—ヘスにおける人間の自己疎外の把握について——ヘスとマルクスとの関係に関する一考察」(「一橋論叢」, 46巻, 1号)参照.

5) 山中隆次「ヘスとマルクス—経済的疎外を中心として—」(上)(下)(「和歌山大学経済理論」, 62, 63号)

6) 山中, 前掲稿(下), 33—36頁参照.

なお山中氏は、ここから問題を深めて、〈資本制社会〉における経済的疎外の分析、《賃労働にみられる〈疎外された労働〉観》についてヘスとマルクスとの関係を問い、私と同じような両者の相違を強調される(前掲稿(下)36—39頁参照)。同氏はさらに問題を掘り下げて、両者の《疎外された労働》観の前提としての《労働》論を検討し《両者における〈感性的・対象的労働〉論の有無、したがって〈労働過程論〉における自然および生産手段の意義についての認識の有無が、両者の〈疎外された労働〉論にみられた決定的なちがいをうみだす》ことを明らかにされる(前掲稿(下)40—48頁参照)。

ことになり¹⁾、彼は《あらゆる観念論的弁証法思想家のうちでもっともマルクスの弁証法把握に近づいたけれども、ヘス自身は全く失敗した先行者》であって、《史的唯物論の成立史におけるヘスの役割を》高く評価してはならない²⁾という指摘からみても、マルクスの《感銘》をコルニュのように《強く》とらえることはできないであろう。

このように見てくると、マルクスに対するヘスの影響についてのコルニュの見解は、山中氏の結論されるように、むしろ否定的に見なさざるをえないのであるが、その影響を問題とするなら次の点においてであろう。すなわち、「行為の哲学」でヘスが、労働を精神的活動としてとらえてはいたが、私財有産制度のもとでは生産物が生産者と対立して内的に結合しえず、人間にとって疎遠な、たんなる所有の対象としてだけ現われると見なして、私有財産を鋭く批判したところを、³⁾マルクスが「手稿」で《所

有の範疇》についてはヘスを参照せよとして指摘している⁴⁾のであるから、疎外の理論のブルジョア社会の分析へのたんなる適用ではなく、ヘスがその適用と私有財産批判とを結びつけたところにおいて、ヘスとマルクスとの関係が問題とされるべきではなからうか⁵⁾。そしてこの2点での影響が認められるなら、それは、私有財産批判と結びついたフォイエルバッハ克服の契機として問題となるであろう⁶⁾。この点についていまにわかに断定することはできないが、いずれにしても、疎外の理論の適用と私有財産批判とを結びつけることによって、ヘスとマルクスは同じ視点から同時にブルジョア社会の分析にとりかかるのであるが、ヘーゲル弁証法の継承の相異、つまり山中氏のいわれる両者の《労働》論の相異⁷⁾によって、「貨幣的存在」と「手稿」とにおけるような、その後の両者の分析における相異が生じたのであろう。

1) Lukács: *ibid.*, S.5—6.

2) Lukács: *ibid.*, S. 5.

3) cf. Cornu (Hersg.): *Moses Hess. Schriften*, S.224—225.

なおこの点に、山中氏は《ヨーロッパ的視点からの、ヘス社会主義の積極面》を認めておられる(前掲稿(下)52—57頁参照)。

4) cf. *Marx-Engels, Ökonomische Schriften*, S.133. 訳、前掲書、348頁。

5) この点については、コルニュも前記山中論文も触れていない。

6) 前頁註1) 参照。

7) 前頁註6) 参照。